49. 竹　の　考　古　学

宮崎女子短大　重　松　義　則

化石　地史時代の日本島に於ける竹自生は、仙台、長崎茂木の第三紀層(今より50万年前)に、また第四紀洪積層（10～50万年前）の塩原横浜植物化石群中（スズダケ）に化石として証せられ、秋田花輪にごり川渓谷でもネマガリダケ化石（1万年前のもの）が発見されている。

縄文　下って日本島特有人間文化とせらる縄文時代（新石器時代ＢＣ3000～5000）の土器文様には、竹で描かれたものが多い、例えば竹管文（シノメダケの点文･半截文など)竹篦文・竹櫛・文・櫛目文などがあって当時原住民がいかに日常生活に多く竹使用したかが判る。次いで弥生時代（ＢＣ100～ＡＤ300）乃至古墳時代（ＡＤ300～500）になると竹玉（短切の竹管）が祭祀具として流行しさらにそれが骨、牙、石、碧玉水晶、メノウ製などの装身用の管玉に変り剣・、鏡などと共に貴人富者に愛用されてしばしば万葉歌にも詠まれてた。農耕初期には竹管に貝殻、石庖丁をはめて稲穂を摘んだ。

編工物　竹籠蓆類も弥生時代の重要な技術文化具の一つである。籠は既に古代エジプト（ＢＣ200～300）に存在したが、勿論それは竹でなくて蔓製であった。籠は編方の精（細かい）なものをカゴ、粗（荒い）なものをザルと分けているが、初期の籠は概ねザル系統であり、カゴは古墳後期乃至大和期に入って流行したようである。即ちザルは唐古(奈良、弥生前期ＢＣ200—300)登呂（静岡、後期ＡＤ100～200）遺跡で発見され、今日の南九州、台湾ヤミ族が用ゆるベラに類似し、登呂では当時マダケが自生していたのでマダケ製と思われる。カゴには千葉房州清川、大阪国府遺蹟（籠型弥生土器）同金蔵山古墳（籠型土師器）から出土し、殊に青森県八戸是川遺蹟は縄文時代だというにウルシ仕上を施した今日の籃胎漆器様の高度製品さえも出土した。朝鮮平壌の楽浪古墳（前漢ＢＣ100～１）から発見（昭６.1931）された筐（栗がつめてあった）は矢竹で行李様に編まれ精巧な漆蒔絵が施されたものであった。この筐が後に木製に改良されて筥(箱)の起源をなしたとの説がある。

竹蓆痕の縄文土器が宮崎三股、鹿児島志布志、同狩野、屋久島一湊で発見されたりして黒潮洗う南九州古代民は非常に竹工に親んだようすがうかがわれる。

竹櫛　古代人といえども「おめかし」は必要とみえ、紀記にもクシに関する神話が仲々多い。古墳から発見されるクシはは結歯式という竹ヒゴを重ねて孤状に曲げ糸で縫い結んだもので、なかにはウルシで固めた上等のものもある。また歯の長いいわゆる縦ぐしと、短かい横ぐしとがある。九州では大分下山、福岡寿命、同千年、宮崎西都事勝、天下浄土寺山古墳などから出土し、鳥井竜蔵博士が発掘した浄土寺山のは一遺体につき、大小38ケ（高貴の方の盛装？）もつけていた。このように九州では竹櫛がよく発見され、また大隅のクシラ、日向のクシマなどの地名もあり、この地方は古代竹櫛を多産したとの伝承がある。

以上遺蹟出土品について述べたが、以下文献にみられる古代竹使用の例を上げる。

竹刑　中国古代の有名な刑法名で、春秋（ＢＣ770～403）の昔、鄭の登析という人がこの刑法を作り竹筒に彫りつけたので斯くいう。

竹簡　手紙のことを書簡という。紙の発明以前の古代では竹（木）簡が行われた。中国の安徽省寿県（前漢時代ＢＣ202～ＡＤ８のもの）甘粛省敦煌（年代？）などで発見された。司馬遷（ＢＣ145～96）の大著「史記」130巻は竹簡であったという。新村出によれば紙（かみ）の源は簡の音（かん一かに一かみ）から、字の糸へんは次に述べるように布帛をほぐして紙を製したからであると。

竹布　晋（265～316）の嵇含の著書「南方植物誌」にその製法が載っており、若竹繊維から作った。

竹紙　後漢和帝（105）の代に蔡倫が植物繊維の布帛をほぐして紙製法を発明し、次いで西晋時代（265～289）に竹紙となり、今日の中国に於ける主要紙料となった。日本には島津藩（重豪公1798）へ琉人新垣筑兵衛がその技法を伝えた。筆軸は既に殷の時代（ＢＣ1200）から用いられ、さらに紙の発明により一層盛んとなった。

竹の武器　殷の廃墟（ＢＣ1200）からは竹編小型の盾が発見された。竹弓は我国では鎌倉時代に創ったようで古墳時代以前の古代弓はみな丸木弓であった。竹鏃の使用は古墳時代といわれる。中国の弾弓は竹製の

弦を用いている。矢はその名のようにヤダケが概ね用いられ、 欽明天皇（550）は百済王に矢（竹）を送り奴隷と交換した。竹槍、竹刀に関する古代記録は余り見られないが、鉄利用時代前には勿論盛んに使用されたことと想像される。

炊具食器　無土器時代は炊事とか、水物運搬や酒の醸造に竹筒を用いた。今日でも南方・ヒマラヤ・台湾などの土民らが竹筒をそれによく使っている。中国神農氏は生薬を竹筒に容れて人民の諸病施療に当ったとの伝説がある。宮崎高千穂峡のカツポ酒も古代の名残でないかと思う。中世の大和・京都朝時代の食器類は専ら木竹製が使用されてきたが、秀吉が朝鮮征伐の折彼地より陶工をわが国に入れてから、にわかに陶磁器工業が隆盛になった。

楽器　笛、尺八、笙などについては余り専門的になるのでここでは省略する。

竹パイプ　長崎では延宝７年（徳川初期、1679）倉田次郎左衛門が上水道をモウソウパイプで架設しそれが明治27年（1894）迄も保たれたという。名古屋でも藩政時代竹パイプが使用された。対馬の今里では親の許さぬ仲の若い、男女同志の心中した二つの棺を、村人が粋をきかして竹パイプで連絡して埋めた比翼塚があり、「こんたん」というこれを詠みこんだ悲恋の民謡が生れたと聞く。大阪府柏原町の飛鳥時代住居趾からマダケのタガで結んだ杉板の井戸側がのが発見されている。

む　す　び

古代中国では上述のように簡、布帛、紙、筆などの竹製資料が世の文化発展に貢献した役割は極めて大であり尚孔子（ＢＣ550） が弟子の子路との竹問答、詩人屈原（ＢＣ340） の竹チマキの哀話、司馬遷の「史記貨殖伝」にのる竹林経済訓、 漢武帝（ＢＣ141）の竹堰堤による黄河治水法など幾多の竹史実があり、しかもこれらの人々はみな中国文化の偉大な推進者であり為政者であった。しかるに吾日本では当時縄文（弥生）のいわゆる考古時代を彷徨し、徒らに土器の文様や腐植遺物からのみ僅かに幼稚な原始文化の様相を汲みとりうるに過ぎない。即ち単に竹利用面から眺めても大陸と日本島国間の文化発展度合に大変な断層が存在していたことを容易に了解しうるのである。